
BIOHAZARD ?KAIZOGU?

アルベルト(療養中)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

BIOHAZARD ? KAIZOGU ?

【Nコード】

N8785Y

【作者名】

アルベルト（療養中）

【あらすじ】

バイオハザードの世界。洋館事件から2ヶ月後のラクーンシティが舞台のバイオハザード2の時に転生オリ主なカイゾーグを介入させてみた物語。

この作品は原作や世界観を壊す可能性がございます。そういったものを受け付けない方は、読まれないことをお勧めいたします。ご注意ください。あと文章がグダグダです。

プロローグ

目が覚めた時、俺は妖しい光に照らされた寝台の上に大の字で寝ていた。

「……………」

体は動かす事は出来ず、俺は只々その妖しい光を見続ける事ぐらいしか出来なかった。

* * *

「……………」

どれくらい経過しただろうか？
流石に耐えられなくなってきたので寝ようと目を閉じたその瞬間、顔に影が差した。

『やあ、はやくま 碇 けいすけ 京介君』

閉じかけた目を開ければ誰かが俺を見ている。遮られた光が逆光と
なってしまう、顔は見えないが声から察するに男。

……ん？

今この男は何と言った？

“はざま けいすけ”？ それが俺の名前なのか？

『おや、覚えてないのか？』

そう言った男の問いに俺は一度だけ頷いた。

『なるほど……どうやら君の記憶は少し壊れてしまったみたいだな』
口に手を当てながら男はふむふむといった感じに一人で納得していた。

「……一人で納得してないで出来れば教えて欲しいんだが？」

『ん？ ああ、すまない。これはとても大事なことだ……特に、君にとってはね』

俺の視界から男の姿が消え、代わりに声だけが聞こえてきた。

『さて、では話したいと思うが……回りくどいのは嫌だろうし率直に言おう。君は 死んだ』

「……なに？」

死んだ？ 何時？ 何処で？ 何があった？ 誰が？

「…………俺が？」

解せない

該当する記憶が思い出せない。というより、記憶がない。だから解せない。俺は本当に死んだのかと、冗談なのかと言いたかったがそれはない。

男の言葉には“迷い”が無かったからだ。

非情、無情……言いようのない現実、その真実。

「そうか……………」

受け入れた。

怒ることも、泣くことも、悲しむことも、全て押し殺した。

「……………」

『……………』

静寂

しかし、その静寂を

『少し……いいか？』

男が打ち破った。

「……………ああ」

喉の奥底から搾り出した返事だった。

『君は確かに死んだ……………だが』

男の最後の言葉に一瞬だけ体が反応する。

『君には異世界に転生できる権利がある。それを受けるか受けないかは君次第だが……………どうしたい？』

男が何を言ってるのかイマイチ理解出来なかったが……………答えは決まっている。

「……………行く」

『ふ、分かった。では異世界を楽しんでくれ。ああそれと少しだけ君を弄らせてもらおうよ』

「なに？ それはどういう……………」

何故か急に視界がボヤけてきたかと思えば、そのまま俺は意識を失ってしまった。

第1話

男が弄ると言っていた意味を聞く前に意識を失って次に目を覚ました時、俺は見知らぬ部屋に居た。

「ここは……どこだ？」

体を起こして左から右へと首を動かして部屋を見渡す。家具や装飾品などは一切なく、とても殺風景な部屋で、特にこれといった目ぼしい物は見当たらなかった……部屋にはであるが。

「これは……？」

腹部に違和感を感じて見てみれば、何処かで見たことのあるベルトが巻かれていた。

それと体を起き上げた際に体の何処からか一枚の手紙が落ちてきた。

「……………」

ベルトに関しては知っているようで知っていない。

だが、これは“力”であるに違いないと確信できる。何故かは分からない。ただ本能的にというかなんというかこう、望んでいた物？とでも言うのだろうか？

「……………まさか、そんなはずないよな？」

一瞬、幼い頃の記憶が脳裏を過ったがそれはないだろうと頭を振って忘れる。とりあえずベルトについては後回しにするとして、俺は先ほどの手紙を見ることにした。

『裕京介君へ これを読んでいるということは無事そっちに着いた
ようだね……もっとも、無事でいられるのは今のうちなのかもしれ
ないが』

綺麗に折り置まれた紙を開いて読んでみたが書き方からしてあの男
であることには間違いないのだが……何故だろう、最後の部分かと
てもおだやかじゃないんだが？

『それについてはおいおい分かるだろう。しかし安心してくれ。そ
のために私は君の体を弄ったのだ。気づいているかもしれないがそ
のベルトが何よりの証拠だと思ってくれ』

……やっぱり、そうなんだな。

ああ、そうだよ。確かに、薄々感づいてはいたさ。でもまさかそん
なことってあり得るのか？

だって、子供の頃に夢見た存在なんだぞ？

俺の中で正の感情と負の感情がぐるぐると渦巻いている。喜ばしい
のか、それとも悲しめばいいのか。

『その力を選んだ理由についてだが。その力が君に最も適している
と思ったからだ。……だがもし君がその力を望んでいなかったの
なら 私を絶対に許さないでくれ』

手紙に書かれた文を全て読み終えた俺は最後に書かれた言葉が頭に
強く残る。

「許さないでくれ、だと………?」

そんな事を言われたら怒り切れないではないか。だが、このやり切れない思いをぶつける先はどこにもない。

「……………」

気持ちの整理がつけられず、混乱している今の俺では正しい判断や答えが出せるわけがない。俺は気持ちを落ち着かせるために、そのまま数十分ほどその場から一步も動かなかった。というより、動けなかったと言う方が正しいのだろう。

* * *

「……………よし、落ち着け、落ち着くんだ」

あれから 気持ちを落ち着かせた俺は、そこにずっと突っ立ってるわけにはいかないので状況を一つ一つ確認していく。

俺の名前は^{たけしん}碓京介^{しやうけい}。何らかの不幸がこの身に降りかかり、死んだ人間。それからあの男と出会い、再び生を受け、この世界へとやって来た。

この世界がどういったところなのかについては男の手紙に書かれた通りいずれ分かることだろう。

問題は俺の体だ。

男の言ったように、また俺の予想通りであるのならば……………俺の体は

普通ではなくなっているということになる。

しかし、俺の心のどこかではそうあって欲しくないという思いがある。が、すでに証拠となるベルトが腰に巻かれ、体に違和感を憶える時点で、それは叶わぬ願いなのであろう。

「……………ふん！」

試しに床を叩いてみた。

バゴンッ！

するとどうだろう？ 物凄い音を立てながら床に穴が開いた。もちろん、叩きつけた拳には痛みもなにも感じなかった。

これでハッキリと証明された。俺の体は変わったのだ。骨を、筋を、脈を、肉を、毛皮を、鋼と機械で造り変えられて。元の肉オリジナル体があとどれくらい残っているのかと思えるほどに、体は変わり果てたんだ。

“ 改造人間として ”

“ そしてこのベルトが意味する存在として ”

“ 人類の自由と世界の平和のために戦う戦士として ”

“ 仮面ライダーとして ”

「 は、 はは、 ははは …… 」

勝手に乾いた声が出てしまう。笑いたくないのに笑ってしまう。

これは悲しんでいるのだろうか？
それとも喜んでいるのだろうか？

これからどうしていけばいいのだろうか？ 俺もまた彼らのように
人間社会の中で人間のフリをして生きていけばいいのだろうか？

…………… 分からない。今の俺には、本当に分からなかった。

第2話

俺は改造人間としての能力を得た。

軀は剣も銃も効かない鋼の肉体となり、傷つけば自己修復により自然と直っていく。さらにその内には驚異的な力を内包し、人智を越えたある種の超人になれる。

だが、その大いなる力にはそれ相応の代償が付いてきた。

人間性の喪失。人間なのか機械なのか。その曖昧さによってそれを隔てる二つの壁は脆く崩れ落ちた。

それだけじゃない。この力の使い方を一歩間違えば兵器へと成り下がる。

人前でこの力を使ったその時、人には俺はどう映る？ 人間としてか、機械としてか、それとも……バケモノとしてか。

……。

いや、俺が改造人間になったことは事実だ。目を背けて、現実を受け入れられなければ今を見ることは出来ない。

待てよ？

改造人間であるということについては床に穴を開けた時点ですでに立証済みのようなものだが、俺はまだ確認してないことがあったぞ？

もし……もし変身できなかったらどうする？

別に変身できなくとも改造人間となった今の俺なら大抵の奴らは蹴散らせるような気もするが……小さい頃にビデオで見たヒーロー、仮面ライダー。テレビの中にしか存在しないそのヒーローと同じ境遇になったのに、肝心のライダーに変身できなきゃ何か嫌だ。

しかもあの男が選んだのがよりもよって俺が結構気に入ってるライダーだし……少し不安になってきた。

訂正。少しどころじゃない、とても不安だ。

念のためベルトを見る。大丈夫だ。変身のために必要な物はちゃんとベルトに付いてる。

「よし、ならこれから……」

これから俺はどうすればいいんだ？ 改造人間としての能力はある程度予想はつくからいい、変身出来るかはまたその時に考えればいい。

しかし、この世界についてまだ何も知らない

はずだったんだが……

「……………ん？」

上着のポケットから何かが見出ている。

まだ手紙があったのか、と思いつつ手紙を読む。

『一枚目の紙に世界についてはおいおい分かるなんて書いたけどやっぱり言っておくよ。君がいる世界はね、結構有名なゲームの世界なんだ。知ってるかな？ バイオハザードっていうところなんだけど……？？？？』

なん……………だと？ バイオハザード？ 読み間違えたか？

『バイオハザードっていうところなんだけど……？？？？』

読み間違いじゃないらしい。バイオハザードって……………あれだよ

な？ 確かゾンビと戦うサバイバルホラーゲームだったよな？

一枚目の手紙を読んでみる。

『もつとも、無事でいられるのは今のうちなのかもしれないが？？
？？？？』

『しかし安心してくれ。そのために私は君の体を弄つたのだ？？？
？』

……なるほど、な。これなら俺の体はこうなって良かったのかも
れない。

しかしなあ……改造するぐらいなら最初からもつとマシな世界に送
ればよかったんじゃないのか？

俺にあの男が何を考えているかなんて、分かるはずもなかった。

第3話（前書き）

すみません、投稿遅れました。

第3話

「ッ……ゾンビだらけだな」

部屋の窓から外を見た時、俺は思わず息を呑んだ。

腐乱臭が熱風に乗ってここまで漂ってくる。

言うまでもなく、その悪臭を放つ正体は皮膚が溶け、肉は腐り、骨が剥き出しになったゾンビ。

一匹や二匹では収まらず、右を見てもゾンビ、左を見てもゾンビ、ゾンビ、ゾンビ、ゾンビ、ゾンビ……何処も彼処もゾンビで溢れかえっていた。

街の至る所で赤い灯火がついている。

車の多くは建物に激突しているか横転して炎上している。熱風もこれが原因だ。これだけの数の車がこうなっているのはおそらく、行き急ぐように走る車が多数だったのだろう。

そして……路上に飛び出した人やゾンビに驚いてハンドルをあらぬ方向に切った、と。

もしくは運転していた人間が噛まれていて途中でゾンビ化してしまったかのどちらかだろう。見れば炎上している車からドアを破って

ゾンビが這い出てきている。

ただ、その前に言える事は一つ。

そこにあつたであろう日常は一変し、広がるのはまさに阿鼻叫喚の地獄絵図ということだけだ。

「……………」

この惨状をいま一度見て思う。

始まりは何だったのか？ 一体誰が壊したのか？

思えば、俺が見下ろす視線の先にいるあの呻き声を上げながら彷徨うゾンビ達も元を正せば人間であり、もしかしたらつい数分前までは人間だったのかもしれない。

至る所に横たわる亡骸を貪っているのは、友か、恋人か、それとも家族か。逃げる間にその人間に引き金を引いた人間はどんな思いだったのか。

そして、そして何よりも……………こうして生きていた人が死に、死んだ人間が生き返るなんて世界が 元はゲームの世界などと思いたくもなかった。

これは、間違いなく現実である。

「……………」

窓から離れて壁にもたれかかり、顔を両手で覆い隠す。俺はこの光

景を全て忘れ去りたかった。

改造人間になっても“魂”まで機械になったつもりはない。
所詮、残された魂が鋼鉄の体に包まれているだけなのだ。

「……………くそ」

改造人間になって力を得ても何も出来ないもどかしさか、もしくはこの現実に弱りかけた俺の心の弱さか。

それとも 改造人間ゆえにくる孤独の辛さか。

くぐもった声で、そう呟いたその時だった。

ド

ン！

突然の爆発により部屋が揺れる。

「な、なんだ!？」

窓から身を乗り出して再び外を見る。爆発の起こった場所は結構近いようで、向かいの建物から二三分ほど離れた所から黒煙が上がっていた。

「爆発!？ ……まだ、人が？」

まだ生存者がいるのか？ だとしたら俺は助けてやりたい。

「ッ……………」

頭の中で嫌な考えが浮かぶ。こんな時にまで考えてしまっているのだから、俺は相当の筋金入りの臆病な人間……いや、改造人間らしい。

頭に浮かんだ嫌な考え。それは、もし助けた人間が俺を恐れたら、化物と呼ばれたら。それは俺にとってはとても怖いことだとても耐えられないことだ。

だが

それでも、誰かを守りたいし助けたい。それがこの力の在り方だと思っから。

グツ、と両足に力を入れる。そのまま、窓から向かいの建物へと跳躍した。

第4話（前書き）

なんか書き方が変わってしまった気がする。

第4話

向かいの建物へと跳躍後、俺は窓ガラスを割って向かいの建物の部屋へと渡ることが

「なッ、飛び過ぎ」

出来なかった。

俺は目標より大きくズレて俺は窓から少し上の壁に激突してしまっ
た。

「い、痛っつっつ………」

……とは言うがもちろん、痛みは感じなかった。

勢いあまって壁に体がめり込んでしまったが、おかげで自分が思っ
てるよりも力加減が上手く出来ていないという事を知れたのでまあ
良しとしよう？

それに痛みはなくとも地面まで真っ逆さまに落ちるのは遠慮したい。

しかし………さすが改造人間と言ったところ。向かいの建物へは通
りを挟んで数十メートルもの距離があったのだが難なく届いた。

……建物内に入ることは失敗したが。

そのあと建物の屋上に出て向かいの屋上へ飛び移り、爆発があった
場所の付近へと到着した。

「あれか……………」

爆発の原因だが、どうやらパトカーを潰して横転しているタンクローリーのようだ。

「……………生存者はどこだ？」

辺りを見渡す。が、それらしい人影は見当たらない。代わりに、爆発音を聞きつけたゾンビの姿がチラホラと見受けられた。

爆発に巻き込まれた可能性も浮かんだが、それなら大小の肉片が散らばっていてもおかしくないはずである。

だがそれらしいものは見つからない。

なら、今しがた此処に居たであろう生存者は、何処かへ向かったと考えるのが妥当だろう。

しかしこのまま見下ろしても見つけれられない。ここからは下に降りて生存者を捜すでしょう。

「……………」

俺は屋上から飛び降りたその

刹那

「ライドルホイップ！」

ベルトから格納された武装を兼ねたツール『ライドル』を引き抜くと、ライドルは形状記憶合金によってフェンシングソードと短鞭を掛け合わせたような剣『ライドルホイップ』に一瞬にして成形。

俺は落下地点の周辺にいた一体のゾンビに狙いを定め、着地と同時にライドルを薙いだ。

すると、ゾンビの下顎から上の部分が切り裂かれ分離。そのままゾンビは力なく地面に倒れこみ、ピクリとも動かなくなった。

「よし、ちゃんと機能している。それと　弱点は頭でいいのか？」

少なからず不安を抱いていた、ライドルが使えるのかということを確認することはできたが、同時にゾンビの弱点を知らなければならなくなった。

バイオハザードというゲームがあるのは知っていた。

ただし、そのゲームのストーリーが主人公が謎のウイルスによって変貌した人間や異形の怪物を倒し、最終的には基地や街から脱出する、という合ってるのか合っていないのか分からない中途半端な知識

を持っている程度で、だ。

もしかしたら今の個体は偶然頭が弱点だったのかもしれない。つまり、ゾンビは頭部を破壊するのが一番有効なのは俺には皆目見当もつかない、ということだ。

「……………つと」

などと考えていたら周りにいたゾンビがこちらにゆっくりと近づいてきた。

相手をしてやる、と言いたい所だが今は相手をするつもりはない。第一、俺の目的は生存者の救出であってゾンビの殲滅ではない。

早く生存者を見つけないと、そう喉から出かけた時

パ　　ン　　パ　　ン……………

遠くの方から銃声が鳴り響いてきた。

「銃声！？ あっちか！」

邪魔なゾンビをライドルで蹴散らしながら、まだ見ぬ生存者を助けるために俺は駆け出した。

第4話（後書き）

タイミングの悪いことに試験がッッ！ その間は更新が出来ないか
もしれません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8785y/>

BIOHAZARD ?KAIZOGU?

2011年12月2日00時48分発行